

「東京新聞」は6回に渡って「侵攻の波紋 あらがる人々」を連載している。その中から、考えさせられたことを二つ、紹介し、感想を書きたい。

一つは「無人兵器」である。現在、ウクライナ上空にロシア軍の無人機（ドローン）が飛び交い、市民を殺し、電気、ガス、水道などのインフラを破壊している。人間が武器を持って、人を殺す戦争でさえ、容認することはできないが、無人の兵器が人を殺傷し、都市や公共施設を壊すことには、いたたまれない怒りを感じる。無人兵器は第二次世界大戦の時から、考案されていたようで、初めて知った時、卑劣な武器だと思った。無人兵器は遠くで、指先のスイッチで操作できるから、攻撃する兵士が死ぬことはない。

「侵攻の波紋」の第1回は、無人兵器に関わった、米国人のクリストファー・アーロン氏の体験を報告している。彼は正義感と使命感に燃える若者で、米中央情報局（CIA）のドローン情報分析官になり、対テロ空中分析センターに配属された。米国はアフガン戦争で、ドローンの画像分析からミサイル攻撃を行った。彼はアフガンから1万1千キロ以上離れた、モニターの前に座り、ドローンの映像を見続け、標的を見つける。すると、司令官が攻撃を決め、オペレーターが手元のジョイスティックでミサイルを発射する。爆撃が成功すれば、同僚と喜びのハイタッチをする。ところが、ミサイルで吹き飛んだ翌日の様子をモニターで見ると、標的より多くの樞が運ばれている。近くにいた一般市民を巻き添えにしたのである。自分は安全な所にて、普通の市民生活を送っている。次第に「何かがおかしい」という感覚が抜けなくなった。再び、ドローン関係の仕事を依頼された時、突然の吐き気や原因不明の発熱に襲われた。戦場で非人間的な経験をした兵士は心的外傷後ストレス障害を負う。狙撃兵として何百人をも殺害した兵士は、帰国したら英雄扱いされるが、精神を病み、暴力的になり、麻薬中毒になり、自死などもする。アーロン氏も同じような症状に見舞われたのである。これらの症状は、人間は人を殺せない感性を持っているということの証ではないか。無機質なドローンに、前触れなく攻撃された人は憎しみを増すだろう。彼はドローンによる戦争の実態を伝える語り部として活動し、「人々がこの問題について議論を続けるための声でありたい」と語っている。ドローンは高性能化し続けているが、スイッチ操作で殺害、破壊するドローンは非人間的で、納得できない。

二つ目は「偽情報」である。日本の戦時中、「大本営発表」で連戦連勝の偽情報を流し、国民は正確な戦況を知らされずに、湧きかえった。それが、戦争を長引かせ、取り返しのつかない戦禍を生んだ。戦時には、偽情報が限りなく広がる。ウクライナ戦争で、ロシアは「大統領のゼレンスキーは国民を見捨てて逃亡した」「市民虐殺はウクライナの自作自演だ」という情報を流した。誰もが偽情報であると知っているが、情報が人間に与える影響は大きい。「侵攻の波紋」の最後、6回目は「偽情報」を取り上げ、台湾の情報調査会社の創業者の游知濤氏の働きを報告している。ロシアのウクライナ侵攻に刺激されたのか、台湾では「今日のウクライナは明日の台湾」「米国はウクライナを見捨て、台湾も見捨てる」などの投稿がSNSに溢れかえった。危機感を持った游氏は6千万件を超える中国語の書き込みを分析した。そこから、台湾の不安を煽る投稿は中国官製メディアが記事化し、SNSで拡散させている構図を暴き出した。彼は「身の安全への不安が高まると情報操作の影響を受けやすい」と警告している。世界は流動的で不安に襲われ、情報に振り回される環境にある。今の時代、権力者たちが巧みに発する自己正当化の情報には、特に気をつけることが肝要だと、思われる。